

午後2時半の帰宅

気まぐれに休暇を取って帰宅する車内に

少し傾いた陽射しが射し込む

午後2時55分

学生はまだ居ない

買い物帰りの人もあまり居ない

車窓を通り過ぎる家々と、かすかに青みがかった空

ふと、自分が透き通っていくのがわかる

温められるということを想う

誰かがそこに居る必要などない

自分が生きているという意味——

そのようなものは実は微塵もないのだし

かと言って

生きているということの実体が無いわけではない

空よりも濃い目の青色をした座席が

一点鎖線のように並んでいる

そこに、置物のように、ぽつ、ぽつと座る人も

点描で浮かび上がる輪郭のようだ

そして全ては、解像度の低い動画のように

不連続で、戸惑いながら流れている

左肩口の後ろから射し込む光が強くなり

僕の背中が熱せられてゆく

グレーの床に窓の形が鮮やかに縁どられてゆく

向かいに座る女性のデニムの生地が白く光る

駅を降り、歩いてゆく

歩きなれた道

しかし、見慣れぬ表情、少ない音の中で

木材を叩く音が空に向けて放たれている

家の扉を開けても誰もいない

静かに、ひっそりと、猫と眠りを分け合っている

時計は午後 3 時 50 分

僕は世界に包まれていることを感じた

(2011.11.4)